

# 信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

## 課題図書 志賀直哉 『范の犯罪』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字程度で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから [http://bookclub.tokyo/?page\\_id=714](http://bookclub.tokyo/?page_id=714)

今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)

## 志賀直哉 『范の犯罪』



第 396 回の YouTube 読書会の課題図書は、志賀直哉の『范の犯罪』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

## 『范の犯罪』志賀直哉 感想文

「弱い癖に本統の生活に生きていたいという欲望が強かったからです」(新潮文庫 p.288)

妻の不貞を知りつつ生活続ける范という奇術師が起こした、曲芸中の妻の殺害、「故意」か「過失」か。

「本当の生活」と「本統の生活」(p.288)、小説では両方書かれていたが、「本当」とは、嘘でなく本物の愛のある妻との生活という意味なのだろうか。

自分の中では、偽りの毎日から逃れたい、普段のごく普通の生活を取り戻したいという范の気持ちがわかる。

「本統」というのは、「人として正しくきちんと本物でありたい」という、信仰の中に見つけた正しさを実践して生きていたいという強い欲望であったと思う。

しかし、その本統は范をとて苦しめていたのだ。

残酷にも妻の死が、その苦しみから解放されるという想像もつかない事態となってしまった。

妻は范と結婚後八か月目で赤児を産んだ。范の子ではない。愛していた妻が憎悪へと変わり、その憎しみを抑えるためにキリスト教を信じた范。

自分の本当の子ではないと分かってからの范の憎悪は、その前までは妻を真に愛していたという証であったと思う。

また妻も、乳房の圧迫でその赤児を殺してしまったという悲惨な出来事は、無意識の范への贖罪の思いが起こした刹那ではなかったかと想像した。

結婚後も気持ちを強く抑えて生きようとしている誠実な范に、彼女自身の良心が揺れたのだと思われた。

赤児が亡くなったということは、その相手である従兄弟にはもう未練はなかったのではないか。

演芸中、最後の右側にナイフを打ち込もうとした時、妻が不思議な表情をしたというシーンがあった。

この時、范の無意識な何かと妻の直感が不意に強く一致してしまった瞬間の現象であった。

目に見えない不思議な境界に引き摺り込まれていったような、何か強い意識の合致が私の心に引っ掛かったままだ。

「私は只その恐怖の烈しい表情の自分の心にも同じ強さで反射したのを感じたのでした」(p.292)

妻の恐怖の表情は、私には懺悔のようにも感じられた。

「剃刀」と重なる得体の知れない暗闇。

「心まで食い込んでいる疲労」(p.291)

「剃刀」とも通ずるすごい表現であった。

(引用はじめ)

「自分が誤りのない行為をしようという事を考えるのです——然しその考えはいつも結局何の解決もつけては呉れません」(p.287)

(引用おわり)

二十歳前後にキリスト教伝道者、内村鑑三に影響を受け、そしてそこから離れていった志賀先生の心の内を思わせる表現であった。

「正しく生きる」、それを実践する世界がこの世にはなかなか用意されていないと思う。しかし心の隅にはいつも必ず置いておきたい。

この作品は、作者と范の繰り返される自問自答が強く響いてくるようだった。

座長も口上言いも、ずっとそばにいた付き人も、「故意」か「過失」かがわからない。

そして范自身も、どちらかわからない。この一致は、彼の無罪への一つの証拠であると考えられた。殆どが嘘のない周りの人物、范の審判へ不利になる証言を避けたいと思う仲間達からは、范の日頃の人柄の誠実さを感じる。

反面、妻の死後黙祷する仕草、信心深く見えるかもしれないという彼の抜け目のなさ、無罪になるための画策さえもしていた范。妻の死を全く悲しまなかったその状態は、やはり神経衰弱であったのかもしれない。

しかし、その表裏を裁判官に全て正直に話すことに至った。

「故意」か「過失」か。妻を殺したいと思っていた范だが、いつもと違う緊張の中で自分を制御して殺人を犯したとは、私は到底思えなかった。

自分に正直でいられること、つまり秘密がなくなったということに、「自白という事はなくなった」という范の着地点である。

裁判官は、「無罪」と書いた。

(おわり)

## 志賀直哉 『范の犯罪』 感想文

図々しさと弱さ。似たもの夫婦。じめっとしてて、正直嫌な2人。話が怖い暗い。暗いけど嫁を的にしてナイフを投げるといふワイルドで情熱的な究極の芸を行う夫婦。

フランス映画の『橋の上の娘』という作品を思い出した。

橋の上で死のうとしていた若い女をオジさんが的にスカウトする。ナイフ投げの場面がパッションそのもの。

誰とでも寝るような若い女的な女はついに運命の男を見つけたと言い、若い男と旅立つ。ナイフ投げの男は代理的的の女を曲芸中に刺してしまう。心が乱れるとダブルフォルトする。

以前雑談でお話しされていたロベール・ブレッソン監督の提唱する「シネマトグラフ」

志賀直哉はブレッソン監督の言うシネマトグラフ的文学かもしれない。

演出したり、ドラマチックに感傷的に、盛ったり飾らない。華もないかもしれない。

説明を排除して、観客を置き去りにするような。

と言ってもまだシネマトグラフの意味はなんとなくしか分かりません。

刺激や感動を当たり前のように期待しまっている自分には志賀直哉とブレッソン監督はいい薬で学びになる。

でもパンデミック下で志賀直哉全集を買ってから一度もひらいておらず、今回も朗読を聞かせて頂き、まだ読んでいないからこれから読みます。

(おわり)

## 『范の犯罪』 読書感想文

裁判に於いて、犯罪を故意か過失か判断するのは難しく、その量刑も、法律や判例に則っては居るが、裁判官の裁量が、少なからず介在するのだと思った。

その裁量次第の部分が、本作の最後の方に描かれていて、最初は人格の見てこなかった裁判官が、最後は「何かしら興奮の自身に湧き上がるのを感じた」という所に、裁判官の人間性が顕れてきて面白かった。

本作を読んでいて、私は、中国に行った時の、何人かの中国人の事を思い出した。それまでは、中国人は元気で大声で話すイメージを持っていたのだが、彼らは、物静かで、落ち着いた雰囲気だった。范という男の性格を考えた時に、彼らの様子が重なった。

范の正直な心情の告白は、裁判官でなくても、心を打つものだった。

前回「剃刀」に続いて、刃物沙汰の話になるが、やはり、投げられる刃は、ドラマチックに、映像として見えてくるのでした。

(おわり)

## 人間とは何か

『范の犯罪』を読んで強く感じたのは、「人間とは何か」「人間の意識とは何か」という問いである。

物語そのものは単純である。夫婦で行っていたナイフ投げの芸の最中、妻にナイフが刺さり、妻は死ぬ。

そして、その行為が故意だったのか過失だったのかが裁判で問われる。しかし、この作品が本当に描こうとしているのは、事件の真相そのものではないように思う。

興味深いのは、主人公の范自身が、途中から「自分でもわからなくなる」という点である。最初は故意にやったと思っていた。しかし裁判の中で、周囲から問い詰められ、自分自身でも考え続けるうちに、本当に故意だったのか、それとも事故だったのか、自分でも断定できなくなっていく。

ここに、この作品の不気味さがある。

この「自分でもわからなくなる」という感覚は、志賀直哉の『剃刀』にも通じるものがあるように思う。

人間は、自分自身の感情や衝動を完全には把握できない。理性的に生きているつもりでも、ある瞬間に説明しきれない感情や行動が現れる。その意味で、志賀直哉は「人間は本当に自分を理解しているのか」という問いを、一貫して描いているように感じる。

普通の推理小説なら、「やった」「やっていない」が最後には明らかになる。しかし『范の犯罪』では、最後まで曖昧なままで終わる。しかも、その曖昧さは単なるトリックではなく、「人間の意識そのものの曖昧さ」として描かれている。

人間は、自分のことを本当に理解しているのだろうか。怒り、憎しみ、愛情、衝動……そうした感情が複雑に入り混じる中で、自分自身ですら、自分の本心を正確に把握できていないのではないか。

この作品を読んでいると、志賀直哉は「人間は合理的な存在である」という考え方そのものを疑っているように感じる。

人は、自分が正しいと思い込みながら間違えることがある。また、自分に都合の良いように記憶や意味を書き換えてしまうこともある。

だからこそ、この作品は単なる犯罪小説ではなく、「人間存在そのものへの問い」を描いた作品なのだと思う。

最後に裁判官が感じた「興奮」も、そのことと無関係ではないだろう。裁判官は、法では裁ききれない、人間の内面の深さと不気味さに触れてしまったのではないか。

『范の犯罪』は、「有罪か無罪か」を問う作品ではない。

「人間とは何か」という問いを、静かに、しかし鋭く読者に突きつける作品なのだと思う。

(おわり)

## 『范の犯罪』 読書感想文

命を賭けた芸をしているのに、夫婦の間にはほとんど会話がないようでした。

(引用はじめ)

「然しあの男はどんな場合でも結局は自分の方で黙って了つて、決して妻に対して手荒な行ひなどする事はございません。」

(中略)

「妻はその関係に就いてお前に打ち明けたか？」  
「打ち明けません。私も訊かうとしませんでした。」

(中略)

「お前は離婚しようとは思はなかつたか？」  
「したいとはよく思ひました。然し嘗てそれを口に出した事はありませんでした」

(中略)

「妻は私の生活が段々と壊されて行くのを残酷な眼つきで只見てゐました。」

(中略)

「二人は互いに全く口をきかずにゐました」

(引用おわり)

会話が無さすぎます。これでは夫婦とは言えないと思いました。

身籠って結婚してしまった経緯や、離婚した方がいいのはわかっているけれども難しい事情など、ただ自分の中だけでぐるぐると考えていないで、もっとお互いに問題に向き合って話し合うべきでした。

范がたびたび口にする「本統の生活」だって、腹を割って話し合った先にあったと思います。

結婚していれば、いい時ばかりではありません。むしろいい時などほとんどありません。いろいろな問題が起こるものです。辛い時の方が多いです。そういうものを乗り越えて本当の夫婦となるのだと思います。

修羅場を避けていたがために、取り返しのつかない、決定的な事態、子供の死と妻の死が起きてしまいました。夫婦の問題から目を背けてきたために起こるべくして起きたことだと思いました。

真に向き合えなかった夫婦の末路でしょう。

なので、これを犯罪というかどうかは難しいところです。

范は無罪になりました。范がその後の人生で、信仰に逃げることなく、なんでも話し合える人と「本統の生活」を築いて行けるかは、今回のことでその原因に范の中で気づきがあったかどうかによると思います。

(おわり)

## わからないのでムいます。

以前読書会で「城之崎にて」が課題図書だった折、話の中で沓の犯罪について触れられていたので、いつか呼んでみたいと思っていました。

殺されてしまって墓の中で冷たくなった沓の妻の気持ちを書きたかったと志賀直哉先生は「城之崎にて」で記しています。

私も沓の妻の気持ちを知りたいと思いました。彼女は夫を愛していたのか？いなかったのか？8ヶ月で生まれすぐに死んでしまった子は本統に沓の子ではなかったのか？いつか夫に殺されてしまう日が来ると感じていたのか？などなど。

私自身妻子がおり、妻に死んでもらいたいだの子供がいなくなればいいのだとまで思ったことはありませんが、たまに妻が子供を連れて実家に帰った静かな夜など、ああ、こんな日がもっと続けば良いのに…と思います。ただその静寂の中で1人ダラダラ撮り溜めたビデオを見る自分が本統の自分か？と聞かれたら、それはわかりませんと答えるでしょう。本統の自分は信仰の中で見つけられるのか？或いは牢屋の中で見つけられるでしょうか？

沓の犯罪も、城之崎にて、も一年後、来月、来週、明日、1秒後自分が生きている事があり得るのか？自分でそうしようとおもってなくても人の命を殺めたりしてすることを考えなくて良いのか？お前は生きてきた中で自分を偽ってこなかったのか？そんな事を突きつけられている気がします。そして何故自分は今スマホで感想文を打っているのか？過去を重ねてここにいるのか？

考えても考えてもわからないのでムいます。以上、あなかしこ

(おわり)

## 志賀直哉 『范の犯罪』感想文(新潮文庫)

### 1. 事件の前の状況 ～生きながら死人になる～

288 ページから 290 ページにかけての范の長台詞には、范が妻との不幸な関係から離れられない苦渋がよく描写されていた。志賀直哉はその父との不和が有名であるが、そのような実体験とおそらく無関係ではないだろうと思った。本作品でも、しがらみによって思い通りに生きられない不自由さやどろどろとした苦悩を、これでもかというほど描いている。

(引用はじめ) 289 ページ

私は私が左顧右顧(とみこうみ)、始終きよときよとと、欲する事も思い切って欲し得ず、いやでいやでならないものをも思い切って撥退けて了えない、中ぶらりんな、うじうじとしたこの生活が総て妻との関係から出て来るものだという気がして来たのです。(略)自分にはそれを求める欲望は燃えている。燃えていないまでも、燃え立とうとしている。それをもえさせないものは妻との関係なのだ。しかもその火は全く消えもしない。プスプスと醜くいづっている。その不快と苦しみで自分は今中毒しようとしているのだ。中毒しきった時は自分はもう死んで了うのだ。生きながら死人になるのだ。自分はそういう所に立っているのに尚それを忍ぼうと努力をしているのだ。そして一方で死んでくれればいい、そんなきたないいやな考を繰返しているのだ。

(引用おわり)

### 2. 妻の死後 ～自白のない世界へ～

(引用はじめ)

私にはもうどんな場合にも自白という事はなくなったと思えたからです(P295)

(引用おわり)

この台詞の解釈を試みる。妻とのしがらみの中では、范は、欲望を抑え込み、自分にも嘘をつき続けていた。事件によって妻との関係が完全に消滅した今、范はもう自分に嘘をつかずに生きられると思ったのではないだろうか。

裁判官の前に連れてこられたときには、神経衰弱にかかっていたように見えた范であったが、最後のセリフの中で「快活な心持」だと言っている。これは、たとえ裁判という公的な場であっても、裁判官との対話で、自分の心の中にあった思考をアウトプット(ある意味で“自白”ともいえる)した結果、一種のカウンセリング効果があったのではないかとも思える。(神経衰弱も演技だったのかと言われるとなんとも言えないが。)

范が部屋を出て行ったあとに、裁判官は「無罪」と書いた。裁判官の感じた何か知れぬ興奮とはなんだっただろう？ 范の語るしがらみや、「死んでくれればいい」という感情を、裁判官もまったくの他人事としては聞けなかったのではないか。

裁判では無罪となったとしても、なお、本作品のタイトルでもある『范の犯罪』はどの部分にあったのだろうとまだ考えている。

(おわり)

## 「尾道ヘジャンプ！思い切ってとんでみろ！」

(引用はじめ)

「道徳から自由になりたいという望みから、それが本統の生活であると思う点から(中略)自分は自分の欲望に従って自由に行った。然し本統の自由というものが与えねばならぬはずの延び延びとした気あがりやを少しも感じられなくなる」  
(志賀直哉全集第六巻暗夜行路草稿 草稿6 60P)

「自分を欺いて、過失と我を張るよりは、何方か分らないといっても、自分に正直でいられる事の方が遥に強いと考えたのです」  
(河出書房新社日本文学全集 13「志賀直哉『范の犯罪』334P」)

「古典的、朦朧とした言葉であるが、もしこの言葉が、理智と欲情との精密な協和を意味するなら、志賀氏は正しく古典的な人物である(中略)『殺した結果がどうなろうとそれは今の問題ではない(中略)破っても、破っても、破り切れないかも知れない。然し死ぬまで破ろうすればそれが俺の本統の生活というものになるのだ』(『范の犯罪』)(中略)私は嘗て氏を評して古典的だという言葉を書かないし、又、氏の原始性を強調した言葉を書かない。恐らくそれは氏の全作が、比類なく繊鋭な神経をもって装飾されているが為だ(中略)古代人の耳目は吾々に較べれば恐らく比較にならぬ位鋭敏なものであった(中略)最上芸術は例外なく自然の叫びを捕えているのだ」(小林秀雄「志賀直哉」新潮文庫 36-44P)

「この解決は飽くまで自然だ。自然だからわれわれは最早その成否を疑う必要はないのだ。范が己れのこの『犯罪』の結果に対して、何等悔いを感じないのもこの故だ。裁判官が『無罪』と判決するのもこの故だ。この『犯罪』は最早、人間の如何なる後悔をも懲罰をも越えた、いわば人間の内部に潜んでいる自然力そのものの『犯罪』なのだ」(引用は梶木剛編『井上良雄評論集』国文社、一九七一による)」(本多秋五「志賀直哉(上)」岩波新書 104P)

(引用終わり)

大正元年 11 月から始まった尾道での生活は当初「暗夜行路」の前身「時任謙作」の執筆にあてられた。それらの草稿群中「草稿6」にて鋭敏過ぎる神経から発想された「道徳からの自由」「本統の生活」は「范の犯罪」においてその「古典・原始性・自然」を発見され「内面の欲求に忠実な生活の強度」という形で継承された。それは「城の崎にて」(大正6年5月発表)執筆の直接的契機である大正2年 8 月の山の手線の電車にはねられて重症を負い入院、10 月(この月「范の犯罪」を発表。執筆は 8 月ごろからと考えられる)傷の養生のため兵庫県城崎温泉に行った経験によりある種の弁証法的進化を経て、

(引用はじめ)

「彼は今、自分が非常に大きなものに包まれている事を感じた(中略)自分だけが、一人自然に対し、こうして立っている」  
(新潮文庫「暗夜行路」136P)

「彼は広い広い世界を想い浮べた(中略)そう想い広めて行って、更にその一原子程もない自身へ想い返す。すると今まで頭一杯に拵がっていた暗い惨めな彼だけの世界が急に芥子粒程のものになる」

(新潮文庫「暗夜行路」180P)

「懺悔と云う事は結局一遍こっきりのものだ、それで罪が消えた気になっている人間よりは懺悔せずに一人苦んで、張のある気持ちでいる人間の方がどれだけ気持ちがいいか」

(新潮文庫「暗夜行路」449P)

(引用おわり)

といった境涯にまで高められた。その経過の中に「山科四部作」もある。

後年の志賀作品が脱俗的であり、むしろ老荘的世界にまで到達しているのは、己自身という山脈を厳しく登り詰めていった頂点からの眺望が作品そのものとなったからだ。

「范の犯罪」は後年の志賀文体の特徴である余白を最大限に活用した重層的表現にいたっていない。しかしこの時、一切の曖昧さを徹底的に排除し、果敢に肉薄したことが最高峰踏破への布石となった。

(おわり)

## 『范の犯罪』 読書感想文

現在『楡家の人びと』第二部を同時に読み進めている。その中で最も印象に残った人物は辰次こと蔵王山である。彼は楡家に住み込み、医者になることを夢見ていたが、その巨体ゆえに基一郎から力士への道を勧められ、「蔵王山」として土俵に上がることになる。しかしその描写を読んで強く感じるのは、辰次が一人の人格として尊重されていたというより、楡家という特権階級にとっての「見せ物」として消費されていたということである。

ここに浮かび上がるのは、近代社会における「異常の観賞」という構造である。辰次の巨大な身体は、人々の好奇と興奮の対象となり、観客は力士の「神技」を称賛する形で、その暴力性と身体性を安全な距離から享受する。人格よりも先に「異質な肉体」そのものが消費の対象となるのだ。

この構造は、本作『范の犯罪』にも通ずる。范夫婦はサーカスのナイフ投げ曲芸師であり、日常から切り離された「非日常」の空間に置かれた存在である。サーカスとは、正常な社会が外部からその異常性を観賞する商品化された装置にほかならない。作中でも范は、単なる一個人としてではなく、「中国人の曲芸師」という異国的な例外として提示されている。

范は「弱いくせに本当の生活を求めてしまった」と語るが、彼の内面には、理性的日常の中で抑圧されていた強い衝動と「本統の生活」への希求が潜んでいる。観客は彼の危険な芸に恐怖と興奮を覚えつつ、それを娯楽として消費するが、范の殺人もまた文章の中で「スペクタクル」へと変容するのだ。その点で作中で問われる故意か過失かという境界の曖昧さは、単なる法的な問題ではなく、理性と衝動の狭間にある人間の心理そのものを露呈している。

このメカニズムを最も象徴的に示しているのが裁判官の存在である。彼は法と理性を体現する「正常者」として范を審理するが、その過程で「何か知れぬ興奮」を感じる。裁判官は単に范を裁く側に留まらず、范の内面に潜む狂気と暴力性に深く魅了されているのだ。サーカスを理性に飼い慣らされた暴力と見るならば、范の内面にも同一の構造が宿っているとと言える。裁判官はまさにサーカスの観客のように范の犯罪に興奮し魅せられたのである。

さて、范の無罪判決は彼の行為が故意ではなく過失、理性ではなく狂気が生んだ所業であり、それは法律では裁くことができないことを露見する。

このことは近代社会が「異常」や「暴力」を表向きには排除しながら、サーカスや相撲といったさまざまな形で包摂し、消費し続けているという歪みを示しているのではなかろうか。

(おわり)

## 玉井パイド郎が語る実践理性的行為者としての范

范が無罪へと至った根本原理についてカントの『実践理性批判』を典拠とした解説を行う。

だからこれは読書感想文じゃない。

### ▼最高善／信について：

范の掲げる「本統の生活」については作中で明らかにされておらず、そのため読者の想像に委ねられることになる訳だが、この場合、本統の生活とはカント哲学における最高善のようなものと思われる。ここで最高善とは <<徳と幸福とは、相まって人格に最高善の所有を可能ならしめるが(中略)幸福が、可能的な世界における最高善をなす限りにおいて、かかる最高善は全体を、すなわち完成された善を意味する。かかる完成された善においては、徳は条件として最上の善である(※1)>> とあるように徳と幸福が統一された状態を指す。この最高善を可能ならしめる必然的条件として神、自由および魂の不死といった理念が要請され(理性信仰における前提となるため)、他者からの義務(＝強制や指示)ではなく、自分自身による自律的な道徳の実践を行うことになる。この自律を達成するために必要とするのが「信(Glaube)」という理性の働きであり、この信(実践理性的信)は、<<命令されたものではなくて、道徳的な(命令された)意図を促進する自発的な、そしてまた理性の理論的必要と一致するように我々の判断を決定(※2)>> するため、繰り返しになるがこれは義務ではなく我々の信による自律的实践であり、そうした実践理性は自らの最高目的の実現が不可になる事態こそ最大の不合理であるとし、その必要性をもって要請へと自ら向かうのである。

以上を踏まえて、次項では范による「本統の生活という最高善(のようなもの)」への実践を示しながら無罪へと至る過程を説明する。

### ▼范の実践理性／裁判官の確信について：

裁判官との対話において范の殺意は明確であり、例えば、裁判官の <<お前は何故、妻から逃げて了おうとは思わなかったらう？>> という質問に対し、范は <<貴方は私の望む結果からいえば、それで同じ事だろうと仰有るのですか？>> と裁判官に質問の意図を尋ねた上で <<私にとっては大変な相違です>> と語っていることから、范には殺意の意図があったことが窺える。そして、范の回答を聞いた裁判官は <<和(やわら)いだ顔つきをして只首肯いて見せた>> とあることから裁判官自身にしてみても范の殺意を把握できたことによる安堵としての「和(やわら)いだ顔つき」だった事が読み取れる。さらに、范の <<とうとう殺したと思いました>> という発言からも范自身、殺意をほのめかしてしまっている。しかし、ここから一転して范による無罪の「信」が如実となり、それは結末部分における范の発言 <<只自分にも何方か全く分からなくなったからです。私はもう何もかも正直に云って、それで無罪になれると思ったからです>>P.248 という信——意見が主観的にだけ十分であって客観的に不十分であればそれは信と呼ばれる(※3)——が働き、これを受けた裁判官は范の最高善のようなものに対する自律を促されたことで無罪を確信——意見がおおよそ理性を有する限りの人に例外なく妥当するならば、その根拠は客観的に十分であって、かかる意見は確信(Überzeugung)と呼ばれる(※4)——といった形で両者の実践理性が働いたものと思われる。また、こうした行為の実践の為に要請された理念は「神」であり、それは范が聖書を読む描写に裏付けられている。

このように解釈が多岐に渡ってしまったが、以上を総合すると本書は、范の望む本統の生活は主観的な「信」と裁判官の「確信」によって「最高善のようなもの(※5)」へと至る過程において無罪となった、その様子が描かれていることになる。

といったことを考えながら、本稿で採用した「信」と「確信」についてはカントの批判書を読むのではなく、まずは日本人が書いた批判書『お信』を読むべきである、絶対に。

▼脚注:

※1…実践理性批判, 第1部第2編第2章「最高善の概念規定における純粹実践理性の弁証論について」

※2…同上

※3…純粹理性批判, II 先驗的方法論, 第2章第3節「憶見、知識および信について」

※4…同上

※5…范による殺意からして道徳的ではないため最高善ではなく「最高善のようなもの」とした。

以上

(おわり)

## 范の願った「本統の生活」とは、ビオスのことである

妻が授乳のときに子どもを窒息させてしまったのは、夫である范との関係をやり直すための故意の殺人だったのだろう。たとえば、ライオンのオスは、ボスを追い出してのつとつた群れの子どもを殺し、ライオンのハーレムのメスたちに新たに自分の子どもを産ませるといふ。たま、人間の世間でも継子いじめの話はよくある。

范の妻は婚前に誰かと子を作り、それを秘密にして范と結婚した。お腹の子どもを范の子どもであるかのように騙していた。范の子ではないと正直に言わなかったのは、彼を騙そうとする意図があったのか、そんなことは彼女にとっては大した問題ではなかったのか、よくわからない。しかし、妻の産んだのが自分の子ではないと気づき、范のライオンの如き動物的本能が、何らかの不満をつのらせたとき、彼女は子どもを自らの手で窒息死させたのである。夫に義理立てて子どもを殺したのである。そして、その後、無意識に子殺しを強いた彼を恨んでいた節がある。妻は夫の『生活が段々と壊されていくのを残酷な目つきで只見て』(P.287)いた。この『目つき』は、恐ろしい。男性にとって恐ろしい目だ。妻にも言い分はある。おそらく、論理にならない感情的で辻褃の合わない言い分である。この言い分は、赤ん坊を殺してまで夫に忠義立てしなければいけない妻の動物的な本能からくる反射である。残酷な目つきはここからくる。

范からすれば、赤ん坊が死んだとて、まだ妻の嘘を許すわけにはいかない。しかし、妻のほうは、生まれた子を殺すことで、自分の嘘は償われたと自分では思っている。これ以上夫である范から感情的に非難されるいわれはない、と思っているだろう。范が許せなかったのは、妻が自分を騙そうとしたことであって、自分の子どもではない子どもを産んだことではなかったのだろう。

彼のわだかまりは、物理的に誰のかわからない子どもがいなくなり、妻が今度は自分の子どもを産めば、アップデートされるような、ライオンの群れにあるような単純な問題ではない。また、当てつけに子どもを殺すような選択をした妻に対して、嫌悪を覚えると同時に、そういう環境でしか生きていけない自分自身の生活に、范は嫌気が差したのである。

妻は旅芸人の妻であり社会的信用もない。帰る実家もなく、まとまった金も持っていない。別れればいいのだが、妻を孤立無縁にしてはいけないという扶養上の義務感もあり、范は妻と別れることができない。子どもが生まれるまでは彼は妻を愛していたのだし、周囲の人から見れば、ふたりとも柔和で親切で、なおかつ克己心の強い人間である。

范が裁判官に質問されて、ぼつぼつ答えたことのなかに、今まで彼が口には出さなかった諸々の思考そのものがある。そのもつれた思考が、ずうっと范の精神を苦しめていた。

過失を装って舞台の上で妻を殺すことは計画されていたことではないが、范は、過失を装って妻を殺せば、あくまでも自分の意図して殺したのではないという形に見せることができることを知っていた。

結果的に、偶然にも妻の頸にナイフを刺し、殺してしまった。

この話は何を描いているか、ある概念を引用して考えてみたい。「ゾーエー」と「ビオス」という概念である。

古代ギリシアでは、人間の生命には「ゾーエー」と「ビオス」の二種類があると考えられていた。「ゾーエー」は「剥き出しの生」とも呼ばれる、動物の生命そのものである。それに対して、「ビオス」は、動物的な生を超えた人間独自の生活形式を持った生である。

子殺しは、ゾーエーにはありふれた現象である。ライオンでも野良猫でも起こりうる。妻が子を殺したのも、范が妻を殺したのも、ゾーエーの行為としては、本能的な行為であり、ありふれた行為である。

しかし、人間にはその動物的な本能を抑圧して、文化的な生活を営む能力ももっている。連れ子を自分の子として育てること、妻の不貞を許すこと、そうして夫婦生活を継続していくこと、こういったことは、強靱な忍耐がいるとはいえ、人間にできないことではない。范に財産があれば可能だっただろうが、残念ながら、彼に財産はなかったので、精神的余裕もなかった。またキリスト教の力を借りれば、その苦しみを人間の現在ゆえの苦しみと定義し直し、信念をもって苦難を忍耐して、最後の審判後の永遠の生命に望みを託すかもしれない。范はキリスト教に救いを求めたが、叶わなかった。しかし、文化的、宗教的力は、人間に野蛮な子殺しをさせてしまうゾーエーを抑圧する力になる。

范の願った「本統の生活」はとビオスのことである。妻を許し、共に生きていくビオスである。彼は頭ではこのビオスを生きたいと思っているが、「ゾーエーそのもの」と范には見える妻の肉体そのものに触れると、それによって彼の追求する「本統の生活」としてのビオスを破壊されたように感じる。さらに、自分もゾーエーに引き戻されるのを感じて絶望をおぼえてしまう。彼の妻は、ビオスを理解しない。そんな生活上の余裕がなかったのである。だから、せめて范の生活が自分と同じゾーエーのレベルまで墮落するのをお願いながら、『冷然と側から眺めている』(P.287)

(引用はじめ)

その位なら、なぜ殺して了わないのだ。殺した結果がどうなろうとそれは今の問題ではない。牢屋へ入れられるかも知れない。しかも牢屋の生活は今の生活よりどの位いいか知れはしない。その時はその時だ。その時に起こることはその時にどうにでも破って了えばいいのだ。破っても、破っても、破り切れないかも知れない。然し死ぬまで破ろうとすればそれが本統の生活というものになるんだ。(P.289)

(引用おわり)

上記の引用部分は、妻のゾーエーと自分のゾーエーを破り尽くさなければ、范の願う「本統の生活」としてのビオスを実現できない、と主張しているように思える。

古代アテナイ人は、ゾーエーを家という私的領域に固有のもの考えていた。プライベートの語源は、「privative プライヴァティブ＝人間として欠けている」である。つまりビオスのない動物の剥き出しの生の状態である。子殺しも当たり前の生である。

それに対して、都市国家での生活、民会や裁判所やアゴラでの市民同士の討論こそがアテナイ人のビオスであった。都市国家＝ポリスでの政治活動や言論活動こそが人間のビオスを実現するのである。

私的領域の夫婦生活にビオスはないし、参政権のない外国人である范夫妻に政治参加してビオスを実現するのは本来、不可能である。しかし、志賀直哉は范に仮託してビオスとしての「本統の生活」を追求させている。無茶である。

アガンベンは『ホモ・サケル』の中で、古典世界に登場する殺害可能かつ生贖化不可能な「ホモ・サケル」というゾーエーの存在について語っている。

ある共同体の法秩序が解体し、人間存在がゾーエーのレベルまで墮落する危機的状況を迎えたとする。解体していく共同体の構成員が、そのゾーエーとなった構成員の中から一人を「ホモ・サケル(聖なる人)」として選び、公衆の面前で見せしめに殺すことによって共同体の法秩序を回復するという行為にうって出ることがあるという。アガンベンは、その「ホモ・サケル」の殺害者こそが法秩序に責任を持つ本来の主権者なのである、と主張する。

殺害された妻を「ホモ・サケル」と考えれば、范は主権者である。彼は「本統の生活」としてのビオスを回復するために、ゾーエーとしての妻と、自分自身のうちなるゾーエーも殺したのである。

彼はビオスの法秩序を回復するために、剥き出しの生としての妻を殺したのであるから、主権者である彼の殺人は法秩序以前のものであり、罪に問われない。よって無罪なのである。

主権者は罪に問われない殺人を犯すことで、人間と剥き出しの生にある法秩序の境界線を回復するのである。

このように『ホモ・サケル』の概念の実例として本作を読めば、『范の犯罪』において何故、最後に裁判官が『無罪』という判決を下したのかに、論理的に説明がつく。ゾーエーから「本統の生活」としてのビオスを救い、法秩序を回復しようとした范の行為に、裁判官も思わず興奮をおぼえたのである。

(おわり)